

市民が調査する意味

特定非営利活動法人 水環境地域ネットワーク

代表理事 岡谷政宏

今年度、市民のみなさんと外来植物の分布調査を行ってきた。その成果を報告するにあたって、私たちが考える「外来植物分布調査」の持つ意味と今後の展開をご紹介します。

今回の調査では一般の市民のみなさんに身近な場所での外来植物の植生調査をお願いした。

そのとき注意したのは、対象となる種の選別であり調査の正確さ・収集方法の簡便さなど多岐にわたるが、最も重要だと考えたことは参加する人々の自然環境に対する**認識の共有**である。そのために、説明のための観察会を実施し、冬期には「自然を学ぶ基礎講座」を実施した。「自然を学ぶ基礎講座」では、近隣にお住まいの専門家の方々をお願いして、単なる知識の披露ではなく、地域の歴史から生態系についての考え方などを通して認識を共有することを常に意識し講座を行った。

また、今回の調査では一般市民のみなさんをお願いしたのだが、より高い見識のある専門家が調査を行えばより精密な結果が得られるかもしれない。

しかし、市民が行なうことにも大変重要な意味があることだと思っている。

- いつもの場所だから敏感になれる
- いつもの場所だから詳しくなる
- いつもの場所だから変化に気づく
- 身近な場所だから気楽にできる
- 身近な場所だから続けられる

もっとあるかもしれない。この調査の蓄積に勝る緻密なものはない。また、当初予想もしなかった成果も現れてきた。

今回の調査を踏まえ、結果のまとめと同時に調査手法のみなおしと次年度以降の計画をたてている。予定しているのは以下のとおり。

<対象種>

- 季節に合わせて対象種を選定する。
- わかりやすい(混同しない)種の制定に配慮する。
- 在来種も対象にする。(当初の外来植物だけでなく在来種の分布も調べる)
- 希少種は選定しない

<対象範囲>

- 範囲を広げる
 - ・ 開始直後のため歯抜け状態の範囲を埋めていくことを考える。
 - ・ 参加されるみなさんを増やすことが範囲を広げる近道。
 - ・ そのためにも観察会の実施や・告知に努める。
- 他地域も対象にする。
 - ・ 先行調査的な意味合いも含めたものにする。(植生の地域差を考える)

<調査手法>

- 調査手法の検討
 - ・ 配布する地図やシートの形式の検討
 - ・ あまり項目を増やさない
- 調査内容の検討
 - ・ 他の調査成果との親和性に配慮する。
 - ・ 専門家の意見を取り入れる。

<調査データの受け入れ・開示>

- データの受け入れ態勢を整える。
 - ・ データ量の増加に伴って受け入れ態勢を整える。
 - ・ インターネットを利用する(一部の参加者には直接入力してもらう)
- データから見えてくるものを検討する。
 - ・ 報告会を実施
 - ・ 市民の皆さんと専門家を交えた検討会の実施
- データの開示
 - ・ 成果物としてまとめる。
 - ・ つねに見られる状態にする。(インターネット上にも配置)
 - ・ 経過も開示する。

<調査結果の利用> (次年度以降)

- まちづくりへの提言

得られた成果をもとに具体的な具な自治体への提言を行いまちづくりの一助としたい。

今回の調査によって得られるものが学術的にも役だって欲しいが、それと同時に参加されたみなさんが身近な環境の変化に目を向け、身近な環境を常にモニタリングし、それをより多くの人々に伝えていくこと それこそが大変な成果であり、市民の皆さんの環境に対する意識の基礎となることを期待している。